

大妻女子大学における全学英語eラーニング・システムを活用した 英語教育発展の可能性

Using English e-learning system to develop students' English competence at Otsuma Women's University

服部 孝彦¹

¹大妻女子大学英語教育研究所

Takahiko Hattori¹

¹The Institute for Research in English Education, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：イー・ラーニング，自主学習，動機づけ

Key words : E-learning, Self-learning, Motivation

抄録

本研究の目的は、大妻女子大学英語教育研究所が2018年7月から導入した全学の学生が自由に利用できる英語 e-learning システムを活用し、全学的に学生の英語力を向上させるための効果的な方法を考察することである。正規の授業における英語指導だけでは学生の英語力を伸ばすことは困難である。絶対的な英語学習時間を増やす可能性の一つとして、授業外の e-learning を利用する方法が考えられる。英語力向上に必須とされる学習時間の確保を e-learning によって補えることは学生にとっては大きなメリットである。しかし e-learning には課題もある。教員や学生仲間とのかかわりが少なく、高い意欲や動機づけが養われていない限り e-learning の学習は継続が困難である。本研究では e-learning の問題点とその改善方法を検討し、大妻女子大学における英語教育発展の可能性を考察する。

1. はじめに

近年、教育分野における情報コミュニケーション技術 (ICT) 普及を背景として、高等教育の e-learning を活用した取り組みが増加している。大妻女子大学では、大学の附置施設である英語教育研究所が中心となり、グローバル化の動きに対応して、全学的な英語力の向上を共通認識とし、2018年7月から全学の学生が利用できる英語 e-learning システム「スーパー英語 Academic Express 3」を導入した。英語教育研究所では様々な英語 e-learning の中から内容を慎重に検討し、最終的に英語 e-learning ツールとしてエル・インターフェース社の提供する Academic Express 3を選定した。その理由は大きく2つある。1つ目は、全国100以上の大学が採用し、35万人以上の大学生が使っているという実績である。2つ目は、教材における自然科学、社会科学、人文科学などのアカデミックなコンテンツの豊富さである。

e-learning の教材の中には、TOEIC, TOEFL iBT, IELTS 等の英語検定試験の点数を上げることを主目的としたものも多い。しかし、大学で英語を学ぶ意味を考えると、教材は知性を磨くものでなくてはならない。グローバル化した、多文化共生のこれからの社会を生きる学生たちにとって、英語は語学スキルだけではない。英語のスキルと豊かな人間性を育む教育を実現する必要がある。また教員や学生仲間とのかかわりが少ない e-learning では、教材が興味深いものでなければ継続的な学習は困難である。その点では、学生の知性を磨く大学らしい教材を多く含む Academic Express 3であれば、学生の自学自習の継続を促すことができると考えた。

2. 英語 e-learning 研究の概要

2.1. 英語 e-learning 研究に至った経緯

大妻女子大学英語教育研究所が、全学の学生が

利用できる英語 e-learning システムを導入したのは2018年7月である。英語 e-learning は、大妻女子大学の学生、教員、職員であれば、だれでも自由に利用できる。また英語 e-learning は、外国語科目の英語の授業をはじめ、様々な授業でも活用されることが期待されている。英語教育研究所では、導入直後から学生向けの説明会と教職員向けの説明会をそれぞれ2回実施した。また学生、教職員からの要望による個別の説明会を、いつでも実施できる体制を整えている。筆者による英語 e-learning を使った公開授業も年間6回実施している。全学への e-learning 導入からまだ日が浅いということもあるが、現在大妻女子大学では、残念ながら筆者以外ではごく少数の教員しか授業で英語 e-learning を取り入れていない。

現在筆者は、担当クラスのレベル・目的に合った問題を Academic Express 3 にある教材からピックアップしたり、あるいは独自に作成したりして、期限付きの課題として学生に e-learning システム上で配信している。このことを定期的に行うことにより、学生の学習習慣を定着させることができる。

Academic Express 3 には教員が簡単に学生のための教材を作成し、それを管理者用のコンテンツに保存することができる。教材は他の教員（管理者）とも共有できるので、将来的には、大妻女子大学全体、あるいは学部別、学科・専攻別の特徴を反映した、一貫性のあるコンテンツを打ち出し、大妻女子大学ならではの英語教育へと発展させることができる。そのために、学生への英語 e-learning の一層の利用を促すと共に、教員の授業での利用も促す契機とすべく本研究に着手した。

2.2. これまでの英語 e-learning 研究活動

筆者は、学生を導く新しい学び方という考えに基づき、英語 e-learning の実践的研究を英語 e-learning システムが大妻の全学に導入された2018年7月から取り組んできた。大妻女子大学での英語 e-learning 学習は、PC、スマートフォン、タブレットを使用するので、教員と学生の接点が希薄な、無機質な学習行為であるといえる。筆者は e-learning の弱点を克服するための実践研究と共に e-learning の利点に着目した研究も進めてきた。

大妻女子大学が導入した英語 e-learning システ

ムでは、学生の学習時間、進捗状況、英語力の弱点をシステムが的確に把握し、個々の学生にフィードバックすることができる。これは個別指導に近い学習形態といえる。学生は、e-learning システムからの情報を上手に活用することにより、学習効果を上げることができる。一斉授業では、教員による個々の学生への個別指導は限定的となるが、e-learning システムでは、完全な個別指導が可能なのである。

筆者は、個々の学生の e-learning での問題演習における正答率、スコア分布、学習時間とスコアの相関関係、大妻女子大学における学部、学科・専攻別、また学年別の学力傾向などを、様々な側面から把握できた。2018年度は、英語教育研究所としては、かなり徹底して全学への e-learning の周知を行ったにもかかわらず、導入初年度ということもあり、学生の e-learning 利用状況は、あまり活発とはいえなかった。2019年度は、さらに周知を徹底し、学生の e-learning 利用を促し、より多くのデータを集積し、その分析も行った。

2018年度から始まった本研究は、大妻女子大学での英語教育に関するリメディアル教育に生かすための研究にも着手した。現在、大妻女子大学を含む多くの大学でリメディアル教育が行われている。その方法は、入学前教育、初年次教育、補講授業など様々である。しかし、これらの教育の多くは、中等教育で行われてきた学習内容の再教育に重点が置かれている。実際のところ、中等教育課程で習得ができなかった学習内容を、中等教育と同じ方法で学ばせようとしても、そこには無理がある。

英語のリメディアル教育の基本は語彙力をつけることである。Academic Express 3 では、20,000語以上の単語データベースがある。学生が知らない単語を洗い出せるシステムにより、苦手な単語に集中し、効率よく語彙力を伸ばせる。学習した全ての単語を確認できる仕組みもある。この仕組みを利用すると、単語の意味、スペル、品詞などはもちろんのこと、仕分けの状態、学習日、正解度などが一覧で確認できる。

Academic Express 3 では、習熟状況を Vocabulary, Grammar, Reading, Listening の4つのコンテンツで連動させている。1つの言葉を異なる文脈、多面的なアプローチで反復的に学ばせることができるので、総合的な英語力を育むこと

ができる。これは何度も学ぶ、多面的に学ぶのでラウンドメソッドとよばれている方法である。例えば文法問題を解き、それを間違えた場合、それは文法がわからないために間違えたのか、あるいは単語がわからなかったために解けなかったかを判断できる仕組みである。

大妻女子大学の場合、中等教育における講義形式の教員主導型の対面式授業では、十分な英語力を習得できなかった学生が多数入学している。英語のリメディアル教育として英語 e-learning を活用することにより、自分の習熟度のレベルに合った教材で、学生の自律学習を促すこともできる。英語 e-learning 学習を通じて、語彙力、文法力、読解力、聴解力などの英語力を、高等教育を受けるために必要なレベルまで高めることができる。

2.3. 英語 e-learning の研究環境

大妻女子大学では、学生の自律的な学習を通して、英語の語彙力、文法力、読解力、聴解力をバランスよく総合的に高めるために、大学附置施設として英語教育研究所が設立された2017年4月から、英語 e-learning の全学での導入が検討され始めた。市場で提供されている英語 e-learning の教材、5製品ほどを筆者が中心となり英語教育研究所の教員で比較・検討した。その中からエル・インターフェース社が開発し、提供する Academic Express 3 を選定し、大妻学院の情報基盤整備計画として申請した。2018年7月4日、大妻学院の情報戦略会議にて審査の結果、計画が申請の通り了承され、早速、同月より英語 e-learning 学習 Academic Express 3 が導入され、大妻女子大学の全学生が利用可能となった。これにより、授業以外で、さらに英語を学びたいという学生の声に応えることができた。情報基盤整備計画が了承された直後、前期試験直前にもかかわらず急いで導入した理由は、Academic Express 3 は PC、スマートフォン、タブレットに対応し、いつでも、どこでも取り組めるため、学習意欲の高い学生が夏季休業中、自宅でも利用できるからである。

この英語 e-learning 教材の全学への導入により、英語 e-learning の問題点とその対応策、英語 e-learning の課外学習効果、英語 e-learning の発展的な指導法の構築などの研究ができる環境が整った。e-learning の理論と実践、英語 e-learning 教材の開発に関する書籍は、順次揃えている。

本稿では、以下、e-learning の長所と短所、e-learning の欠点を補う対策について考察を行なう。

3. e-learning の特徴

e-learning は学習者中心の、フレキシブルな、多様なスタイルの学習を支援するインターネット技術を活用した学習システムである。e-learning は、いつでも、どこでも、学びたいときに、自分のペースで学習ができるという特徴がある。しかし、これは同時に、いつでも、どこでも、やらなくて済むという意味でもある。e-learning は孤独感に陥りやすく、学習を続ける動機づけを維持することが難しい。学生の e-learning を成功させるためには、この弱点を補うためのサポート体制が不可欠である。個人学習とはいえ、自主性だけに任せるのではなく、進度が遅れていればそれを指摘し、成績が思わしくなければ学習効果が上がるような指導をする必要がある。学習の進み具合や目標達成度、成績管理はとても大切である。学生個人にとって、自分の学習が現在どこまで進み、設定した目標に対してどのレベルまで達したかを随時把握することができれば学習の励みになる。

3.1. e-learning の長所と短所

e-learning の長所と短所は次のようにまとめることができる。長所としては (1) 場所、時間の制約がない、(2) 個人のペースで学習ができる、(3) 様々なレベルの学習者に同時対応が可能、(4) 繰り返し学習が可能、である。一方で短所は、(1) 教材のレベルが合わない、(2) 学習する動機づけが保てない、(3) 学習者の孤立、(4) 時間的制約がないために、逆に学習しない、をあげることができる(荒木^[1], 2002; 大味^[2], 2015; 森田^[3], 2002)。以上の e-learning に関する長所と短所を把握した上で、大妻女子大学における具体的な Academic Express 3 を活用しての英語 e-learning の弱点をサポートする方法を検討した。

3.2. e-learning の弱点を補う対策

e-learning の短所 (1) に関して、Academic Express 3 は、個々の学生の英語習熟度レベルごとに様々な教材があるので、学生一人一人が自分の目標を定め、そこに到達できるように自分のレベルに合った教材を使い、学習を進めることができる。ま

ず Placement Test によって、個人の英語力を確認し、判定後に表示される教材から学習を始めれば、最初から自分のレベルに合致した教材で学習を進められる。Placement Test はいつでも再受験ができるので、学生に定期的な受験を促し、自分のレベルの変化を確認するように指導すれば、常にレベルに合った教材で学習を進めることができる。

英語力はすぐには身につかない。e-learning の短所 (2) に関して、Academic Express 3 には学生個人の英語力や学習記録を一覧できるカルテ機能を備えた My Portfolio がある。ここでは学生個人のスキル別の学習時間をはじめとした客観的なデータをグラフや表で表示してある。この My Portfolio を活用することにより、自身の学習行動の見直しや、動機づけの維持につなげることができる。

Academic Express 3 には Vocabulary, Grammar, Reading, Listening の 4 つのコンテンツがある。My Portfolio のスキル別の学習時間を見ることにより、自分の学習の偏りに気づき、学習のバランスを見直すこともできる。学習のバランスに関しては、教員が何らかの形でアドバイスができる体制を構築すれば、より効果的である。

Academic Express 3 には教員が自分の授業を補う教材や、学生の発展的学習に適した教材を作成し、管理者用のコンテンツに保存し、学生に利用するように促すこともできる。e-learning の短所 (3) の対策としては、教員が準備した教材を学習することにより、教員と学生間のかかわりがある程度は持つことができる。ただこの方法は、教員が、教えている学生に実施した場合は効果が期待できるが、それ以外の学生への効果は限定的である。英語教育研究所では、英語 e-learning の利用を促すと同時に、英語教育研究所主催の英語講座の開講を全学の学生を対象に 2018 年度から始めた。この講座は、TOEIC・IP テストの直前などは学生のニーズに合わせて TOEIC 受験対策講座となるが、それ以外の期間は、英語教育研究所としては、英語 e-learning を利用して自主学習をしている学生が、教員の指導を直接受けられる講座としての意味合いをより強く打ち出せるようにして実施し、効果を上げることができた。

e-learning の短所 (4) の対策としては、Academic Express 3 の週刊英語ドリルの利用が考えられる。このコンテンツは、教材が 1 週間単位で切り替わる。週刊英語ドリルは e-learning での学習を習慣

化させるためのツールとして利用を学生に促した。また Academic Express 3 の Reading のコンテンツでは自然科学、社会科学、人文科学などの知的好奇心を刺激する題材が多い。面白いと思う教材であれば、読んでみようという気になるものである。学習しないという気持ちになるのは、実は興味がわからないからである。

今後共、以上のような英語 e-learning の弱点をサポートする方法を実践しながら、PC、スマートフォン、タブレットに対応し、大学にいる時に限らず、自宅や外出先でも学びたい時にいつでも取り組める英語 e-learning の長所を伝え、大妻女子大学生の利用を一層促すと共に、継続的に学生の意見に耳を傾けて行きたい。

4. おわりに

本研究の目的は、大妻女子大学英語教育研究所が 2018 年度から導入した全学の学生が自由に利用できる英語 e-learning システムを活用し、全学的に学生の英語力を向上させるための効果的な方法を考察することである。日本における e-learning の普及により、高度なシステムが開発され、優れた教材が完成したが、必ずしも e-learning の学習効果へ繋がったわけではなかった。e-learning の難しさは、いかに優れた学習プログラムを用意しても、それだけでは学習者の学力向上には繋がらないという点である。

e-learning の利点は、学習者の好きな時間に納得がいくまで学習が可能という点である。しかし、この利点は学習者にとって問題点ともなりうる。e-learning は自分の意思であることを基本とするため、学習者によって学習効果は大きく左右される (吉田^[4], 2008)。自律度の高低が英語学習への取り組みを左右する場合が多いため、e-learning による学習効果を高めるために重要なのは、いかに自律性を育成するかである。学習者の自律学習を持続的に支援し続けることが e-learning を成功させるための鍵となる。

今後は、過去 20 年間の e-learning 学習による失敗と成功の蓄積を英語教育の視点から捉えなおし、学生の学習意欲を維持継続させるために、「何を」「どのように」すれば自律性の育成に結びつくかに関する英語 e-learning 教授法の実践研究を続けて行きたい。

付記

本稿は大妻女子大学戦略的個人研究費（課題番号 S 1903）「大妻女子大学における全学英語 e ラーニング・システムを活用した英語教育発展の可能性」の研究助成の一部をなすものである。なお本稿以外のこの助成による発表論文等は以下のとおりである。

① 雑誌論文

[1] 服部孝彦, 「大学における英語 e ラーニングの問題点とその対応に関する研究」 *The LCA Journal*, No. 33, (査読有), 日本言語文化学会, 2019, pp. 27-41.

② 学会発表

[1] 服部孝彦, 「大妻女子大学における英語 e-learning の効果的な全学への普及に向けた実践研究」, 日本言語文化学会第 26 回研究大会, 2019 年 7 月 6 日, 大妻女子大学

[2] 服部孝彦, “A Study of the Effects of Speed Reading on Japanese Students” Hawaii International Conference on Education, 2020 International Conference, 2020 年 1 月 4 日, Mid-Pacific Conference Center at Hilton Hawaiian Village, Waikiki, Hawaii USA

③ その他 (講演)

[1] 服部孝彦, “Second Language Acquisition and Learning”, Washington D.C. Japanese Language

School Special Keynote Speech, 2019 年 5 月 12 日, Washington D.C. JLS Auditorium (招待講演)

[2] 服部孝彦, “Language Attrition”, JOES Singapore Keynote Speech, 2019 年 10 月 26 日, The Japanese School of Singapore Clementi Campus (招待講演)

[3] 服部孝彦, 文部科学省, 島根県教育委員会主催, 島根県外国語指導助手指導力等向上研修 (ALT Skill Development Conference in Shimane), Interactive Communicative Activities for the English Classroom, 2019 年 11 月 7 日, 島根県立青少年の家 サンレイク (招待講演)

引用文献

[1] 荒木浩二 (2002). 『実践 e ラーニング: 競争優位に立つ最新手法と成功モデル』. 毎日新聞社.

[2] 大味潤 (2015). 「英語 e ラーニング授業の問題点とその対応策例」. 『尚美学園大学総合政策研究紀要』第 26 号. pp. 1-19.

[3] 森田正康 (2002). 『e ラーニングの「常識」: 誰でもどこでもチャンスをつかめる新しい教育の形』. 朝日新聞社.

[4] 吉田晴世 (2008). 「外国語教育・学習モデル」. 吉田晴世, 松田憲, 上村隆一, 野沢和典 (編) 『ICT を活用した外国語教育』東京電機大学出版会. pp. 10-34.

(受付日: 2020 年 5 月 28 日, 受理日: 2020 年 7 月 2 日)

服部 孝彦 (はっとり たかひこ)

現職: 大妻女子大学英語教育研究所教授

米国ユニオン大学 (UIU) 大学院総合文化研究科博士後期課程修了. 博士 (Ph.D. in English).

専門は英語教育学, 応用言語学. 現在は第二言語習得のメカニズムに関する研究を行っている.

主な著書: *EFL Reading in Japan: Theory, Policy, and Practice* (共著, Mediaisland)